

2008年に米大統領選挙を控えたアメリカでは、早くもその候補者達の名前や動向に注目が集まっている。中でも初の黒人として大統領選に出馬を表明したバラク・フセイン・オバマ氏(Baraka Hussein Obama)に対しては、全米だけでなく、世界のメディアが注目している。中でもケニアの人々にとって彼の出馬は、特別な憧れを持ってその動向が期待されている。

現在、移民の国アメリカには、19世紀南北戦争以前にアフリカから奴隷として連れてこられたアフリカ人の子孫が全人口の12%を占め、彼らは「アフロ・アメリカン」や「アフリカ系アメリカ人」と呼ばれている。彼らはアフリカから無理やり連れてこられたにも関わらず、アメリカでは彼らに対する差別や偏見が存在している。

オバマ氏は、父親がケニア人、母親がアメリカ人(白人)であり、ハワイのホノルルで生まれ、幼少時代をイスラム圏のインドネシアで育ち、アメリカで教育を受けている。父親は西ケニアのルオー族出身で、キリスト教徒が多い同地域でありながらイスラム教に改宗している。オバマ氏のミドルネームが「フセイン」なのは、父親から来ているのだが彼自身はキリスト教徒である。ファーストネームのバラクは、スワヒリ語のバラカ(Baraka)を意識的に英語らしく発音している。“バラカ”とは、“神様からの恵み”を意味する。

彼の政治信念・理念は、アフリカ系アメリカ人としてマイノリティーとして生きてきた人生からくることは彼のスピーチや言葉から簡単に想像できる。しかし彼自身は、コロンビアやハーバードのロースクールを卒業し、弁護士として働いた後、イリノイ州の上院委員となってから、本格的に政治活動を始めている。つまり彼は、エリートである。

しかし、ケニア人の父親は、西ケニアの小さな村で牛を追う生活をしてきた。成績が優秀で、ハーバード大学経済学部へ奨学金を貰って留学し、ウガンダの大学で教鞭を執った後、母国ケニアに戻り、公務員として監査の仕事に就いていた。両親は離婚し、父親は交通事故死したため、オバマ自身父親のことは良く知らないと言っている。

しかし、そんな父親の母国ケニアを今までに3回

訪問している。中でも2006年8月にケニアを含むアフリカ5カ国(南ア・ジブチ・チャド・スーダン)訪問はすでに大統領候補として立候補していたこともあり世界中から注目されていた。彼は、父親のお墓参り、祖母に会うために西ケニアを訪問したり、キバキ大統領を始めケニアの政治家やいろいろな人々に会い、また首都ナイロビにあるキベラスラムを歩いてみて回ったりしていた。実際アフリカを巡って見てのアフリカに対するメッセージはなかなか厳しいものであった。

「アフリカは、自助努力でしか発展しない」

「アフリカは、その豊富な資源をもって国を発展させるべく基本的な法の整備と会計の透明性が必須である」

また、アメリカでも「アメリカには、白人も、黒人も、ラテン系も、アジア系も居ない。居るのは、アメリカ人という国を共に造る人々が居るだけだ」と言ったように、ケニアでも「ケニアには民族が居るが、ケニア人という国を共に造る人々が居るだけだ」と演説し、民族主義や汚職、賄賂の問題を批判した。

オバマ氏のように、外国を知るアフリカ人の数は、奴隷貿易に始まり、教育や仕事で海外に出る人々が増えることにより多くなってきている。「アフリカを客観的に見る目」は確実に増えてきている。植民地からの独立後のアフリカの歴史は、外国人がアフリカの問題を指摘したり、援助したり歴史であったし、現在もそれは続いている。

オバマ氏が言う、「新しい世代のアフリカ人」とは、アフリカの問題を、アフリカ人自身が見つけ、解決を図っていく世代だ。しかし、現実には、外国に出ているアフリカ人はアフリカに戻らないことが多いのも事実だ。特に、奨学金などでエリート教育を受けた医者、弁護士、教師はより高い給料を求めて外国で働き続ける。「頭脳流失」の問題である。また有名なアスリートは、外国の企業にスカウトされて、日本にも沢山のアフリカ選手がいる。オバマ氏は、自身もアメリカでマイノリティーや黒人差別の問題に立ち向かっている人だ。そんな彼のアフリカでの言動が、アフリカ人を盛り上げたのは確かだ。